水の「恵み」と「災い」

五條市立五條東中学校　二年
岸田　丸

私の祖父母は下市町という所に住んでいる。その祖父母の家は、町から少し離れた山の中にある。そこでは、薪をくべて湯を沸かしたお風呂に入ったり、季節が変わるごとに採れる野菜や山菜を採ったりする自然を活かした生活をしている。

私たち人間が生きていくうえで必要な物で挙げられるのは「水」だと思う。大都市とは全く違う環境の山の中ではどのように水を得るのかとても気になり、新型コロナウイルスの流行で小学校が休校になったとき祖父母の家に訪ねることにした。すると、祖父母に連れられ歩き出すと急に異世界に来たような森の中に入っていった。木に生えたきのこ、うさぎや鹿の足跡。目に飛びこんでくる物すべてがとても新鮮だった。山の中のヒンヤリとした心地の良い空気は新鮮さをより一層深めた。さらに進んでいくと険しい山道の端にグレーの塩ビパイプがチラッと見えた。祖父母に聞くと百年ほど昔に近隣の人達が協力して作ったそうだ。その塩ビパイプをたどりながら歩いていくと目的である水源地にたどり着いた。すると祖父母は、水源地の掃除を始めた。きれいに掃除をしないと途中で詰まってしまったりゴミが溜まってしまったりするからだそうだ。掃除を終えて、また塩ビパイプをたどりながら家に向かって歩き出した。森から出てくると急に異世界から現実にワープしたような感覚になった。森から出てすぐに水源地からパイプを通って流れてきた水がタンクに溜まっているのを見た。その時まで何回も祖父母の家に行ってお風呂にも入り、食事もした。今まで何も感じずに使っていた水がこんな貴重に感じたのは初めての事だった。

愛着さえもわいてきた。冬だと凍ってしまって出てこない時もあるそうだ。この後、家に着いて手を洗ったが、何だかいつもと違う不思議な気持ちになった。

祖父母の家では、水の貴重さを感じた。しかし、水はこんな「恵み」だけではない。大雨が降れば川はあふれ、海上で発生した雲とともに日本にやってきて家をも破壊してしまう。なかでも川は、大地をけずって流してしまう。

私が住む五條市には、吉野川という川が流れている。学校の校歌の歌詞にも入る川だ。一年生の時に、理科の先生が地球の分野で教えてくれたことがある。それは、五條市の今の地形は吉野川が作ったという事。長い年月をかけて浸食と隆起を繰り返してできたそうだ。その事を河岸段丘という。吉野川の右岸には、古い町並みが続く新町、牧野とだんだん高くなっている。一方の左岸には、野原、吉野とだんだん高くなっている。言われた通りの地形だった。昔、浸食した時は「災い」だったものが今の五條市を作っているのだ。私たちが住んでいる町は水でできていると思うとすごいと思う。

水には、「恵み」の分だけ「災い」がある。しかし、その「災い」と上手く付き合っていくことでそれを「恵み」に変えることだってできる。そして、水へのみかたを変えることで生活も変わってくると思う。